

平成29年度事前評価課題評価結果

評価年月日:平成29年10月13日

事前評価課題

番号	課題名	研究機関	研究期間	総合評価	各評価人数			
					AA	A	B	C
1	耐病性に優れ需要期に安定出荷できる小ギク新品種の育成	生物工学研究所	H30~34	A	1	8	0	0
2	イチゴ「いばらキッス」の奇形果、先白果の発生要因の解明と生育指標の作成	園芸研究所	H30~33	A	1	6	2	0
3	輸出向け水稲品種の極多収栽培技術の確立	農業研究所	H30~32	A	1	5	3	0
4	クリ果実の品質向上及び高付加価値化技術の開発	園芸研究所	H30~32	A	0	8	1	0
5	薬剤耐性サツマイモつる割病菌のモニタリング技術および防除技術の開発	農業研究所	H30~33	A	2	6	1	0

<総合評価> AA 質・量の両面において目標を超えた優れたパフォーマンスを実現することが見込まれる(採択)
 A 質・量の両面において概ね計画を達成が見込まれる(採択)
 B 質・量のどちらか一方において計画を見直す必要がある(一部見直して採択)
 C 質・量の両面において計画を大幅に見直す必要がある(不採択)

各課題に関する意見等

番号	意見等
1	<ul style="list-style-type: none"> ●白さび病耐性と高温耐性は、両立するのか整理した上で進めて頂きたい。 ●白さび病耐性の品種育成にあたり、育成目標をあれもこれもではなく、開花期なのか、色なのか、高温耐性なのか優先順位をつけて対応すること。ただし、3色揃う品種構成も重要なので、花色揃いのバランスは考慮すべきである。
2	<ul style="list-style-type: none"> ●B品率に占める奇形果、先白果の割合が不明など実態調査も十分でないので、環境要因の解析に合わせて、現地での発生実態の調査もしっかり行うべきである。また、奇形果と先白果の発生要因は異なると思われるので、その解析は別立てで行い、最終的にはそれらを矛盾なく克服できる技術の確立を出口とすべきである。 ●先白果については赤色の発色のメカニズムに関する仮説を十分詰めて取り組むべきと思われる、その上で計画にその仮説を明示する必要がある。 ●栽培環境との関連性を明らかにするには、土壌養分の影響も無視できないので、含水量だけでなく、ECのモニタリング等土壌分析も併せて進めた方がよい。また、地上部の生育についても生育ステージごとの追跡調査が重要と考える。
3	<ul style="list-style-type: none"> ●研究期間が3年と限られているので、研究開始に当たって候補とする品種を絞り込んだ上で、研究戦略・戦術を明確にしてほしい。また栽培条件の検討を並行して進める必要がある。経営全体の中での作期分散等も考慮すると、早生で多収の品種があれば新しい可能性になるので、検討してほしい。 ●食味・品質と耐病性を保ちながらの極多収の追及は、基本的に相反するものであり、極多収品種は品質や食味に十分配慮して選抜されてきたとは考えられない。そのあたりを確認しつつ、テーマを絞った設定を検討すべきである。今後他の産地からの参入も予想されるので、輸出とはいえ適切なアプローチとは思えない。中途半端になることを危惧する。例えば、「輸出向け」ではなく、「輸出を視野に入れた」といった研究課題名ではダメなのか。 ●現在、国内でも安価なお米の需要はあると思う。輸出向けを意識しつつも、外食チェーンなど国内需要にも応じられる品種・技術の開発を望みたい。 ●低コスト化を実現できる実用可能な農作業体系を見出してほしい。また、肥料コスト削減のためには緑肥や自家製有機肥料などの利用も検討されたい。
4	<ul style="list-style-type: none"> ●茨城県のクリ生産上、品質向上と高付加価値化は重要な課題であるが、研究課題名としては、大き過ぎ、抽象的で、研究内容を的確に表していないので、クリシギゾウムシと長期貯蔵対策に絞った工夫が必要である。(例えば、「クリシギゾウムシ被害軽減及び高品質焼グリ生産のための貯蔵・加工技術の開発」)。また、研究内容も、例えば、1. 圃場管理・生育期薬剤散布、氷蔵処理の組み合わせによるクリシギゾウムシ防除技術の実証、2. クリシギゾウムシに対する収穫後大量処理可能なヨウ化メチル代替新防除技術の開発、3. 焼きクリ加工のための生クリ長期貯蔵技術の開発、とした方が分かり易いと思えるので検討してみてはどうか。 ●任期付きの研究員がこの課題を担当されるとのことだが、「大量処理可能な新技術の開発」については、実用化に向けては、組織的なフォローが必要である。 ●クリシギゾウムシだけでなく今後燻蒸剤の農業利用を考えた場合、代替技術は業界・国全体として取り組むべきプロジェクト研究であるので、より広い連携が必要である。 ●大量処理技術にクリシギゾウムシの殺虫効果に加えて、クリの品質向上につながる成果が付加されることを期待する。また、コスト低減の点で、小規模個別導入がよいのか大量処理がよいのか検討する必要があると思う。
5	<ul style="list-style-type: none"> ●何のためにモニタリングするのか明確になっていない。例えば、課題名を「新発生薬剤耐性サツマイモつる割病菌まん延防止のためのモニタリングと防除技術の開発」としてはどうだろうか。また、研究内容も、1. 薬剤耐性菌モニタリングのための遺伝子診断技術の開発、2. 耐性菌まん延防止に向けた多発生要因の実態解析、3. 代替薬剤や生物防除等によるまん延防止対策の確立、としては研究内容を精査してはどうだろうか。 ●他の生産県ではこの耐性菌は出ていないのか。新規薬剤の対応も重要であるが、適用農業の登録拡大という観点のみだと、また新たな耐性菌の発生と言ったように臆ごっこになることが懸念される。難しい部分はああると思うが、輪作体系の導入や、対抗植物の利用、同じ作型を示す新たな品種の探索など、「環境にやさしい農業」の観点を踏まえて研究を構築し進めてほしい。